

市場でやりとりされるもの

上田広美

「チヨムリアップ・スオ」というカンボジア語の挨拶は、「おはよう」、「こんにちは」、「こんばんは」のいずれとしても使うことができるのだが、日常の会話では、こんなあらたまった挨拶をすることは滅多にない。出会った時の挨拶としては、知人であろうがなかろうが、「どちらへ」と声をかけることが多い。そんな時に、声をかけられた方は、一面識もない、今後二度と会うことのなさそうな相手に向かって、いちいち生真面目に「郵便局まで手紙を出しに」とか「友人の家へ遊びに」などと答える必要はない。「ちよつとそこまで」のつもりで「プサー（市場）まで」と答えておけば、たいていの相手は満足して引き下がる。

プサーには、肉、魚、野菜、果物等の生鮮食品から、洗剤、茶碗、蚊帳等の生活雑貨、大量の中古衣料、果ては薬品、書籍から骨董品、絹織物、宝飾品などの贅沢品に至るまで、何でも揃っており、外貨の両替もできれば、買い物に歩き疲れたら腰をおろして軽食や菓子をつまみながら休憩できるような、背もたれのない小さな腰掛を並べた一角もある。人ごみの中、水や泥で汚れないように足元に注意を払いつつ品定めしたものを、定価のないプサーで値段交渉しながら買うのには、体力と気力が必要なのである。

首都プノンペンで最大のプサーは「プサー・トゥマイ」（新し

い市場）と呼ばれる黄色いドーム状の屋根がついた市場で、ドームの中には金、銀、宝石、時計など高価な物を売る店が並んでおり、ドームの外には、それ以外の品物を売るための、日除けに白い傘を広げた台が円形に広がっている。放射線状にはりめぐらされた細い通路はまるで迷路のようで、不慣れた人間は買い物をしているうちに次第に方向感覚がなくなり、欲しいものがあつた「さっきの店」には二度と戻れない。

全国の無数のプサーで日々交換されているものは、物と金だけではない。買い物に出かけたはずの人がなかなか帰ってこないのには、それなりの理由がある。プサーは情報交換の場なのである。プサーの至る所で、売り手と買い手、売り手と売り手、買い手と買い手が、買い物そっちのけで会話を夢中になっている。そしてプサーから発散された噂話は、王室まで巻き込む大騒ぎを引き起こしかねないのである。

「長い黒髪」というのは、文学作品を読んだり、著名な女優や歌手の姿を眺める限り、カンボジア美人の必須条件の一つに数えられるのであるが、一九九九年の六月、カンボジア全土で、数多くの若い女性たちが、その大事な黒髪を惜しげもなく、先を争うようにして切ってしまった。

事の発端はある噂であつた。この噂には、幾通りかのバ

ジョンがあるのだが、大筋は以下の通りである。魔王（もしくは幽鬼）が、国王（もしくは王妃）の夢に現れた。魔王は、未婚女性三千人が髪を切ることを要求した。もしその要求に応じなければ、今年中に、未婚女性三千人分の髪のみならず生命（もしくは魂）までも奪うために、地上に現れると宣言した。このような夢を御覧になった国王は国民の危機を救うために、御自らテレビやラジオの番組に出演なさり、未婚女性たちに髪を切るように呼びかけられた、というものである。

国王が出演したというテレビやラジオの番組を自分で見聞きしたという人は誰もおらず、放送局も「そのような放送は行っていない。そもそも最近国王陛下がテレビ・ラジオ放送を通じて、お言葉を述べられたことはない」と発表したにもかかわらず、魔王に殺される恐怖のあまり、髪を切る女性、娘の髪を無理やり切ってしまう両親が後を絶たなかったという。

この噂とそれが引き起こした一連の騒動については、フランス語でも報じられたために国外にも知られるようになったのであるが、最大の購読者数を誇る日刊紙『リアスマイ・カンプチア』は、六月二十四日、「魔王に殺されないように、髪を切つてよ」と床屋に泣きついている、長い髪の若い女性を描いた風刺漫画を第一面トップに載せ、この噂があまりにも広まったため、ついに王室官房が、「報道されているように、国王陛下が噂になっている夢を御覧になったというのは、事実ではない。このような報道は王室をおとしめようとする中傷である」という主旨の文書を発表したと報じた。

識者の解説によれば、「魔王が長い髪の女性の首を切つて歩く」という同種の噂が、三十年前にも流布したことがあるという。ま



黄色いドーム状の屋根がついた市場

た、噂の源としては、社会不安をあおって為政者の信頼を損なおうとする政治団体、もしくは、近年頻繁に現れるようになった新興宗教家が考えられるという。この類の新興宗教家たちは、自ら救世主「セアー・メトライ」であると名乗っているのだが、奇怪な衣装を身に着け、カンボジア語ならぬ、あやしげなサンスクリット語を駆使して世の終末を訴えては、信者を集めている姿が、マスコミに取り上げられている。

隔週刊の総合雑誌『プロチアプライ』が七月に紹介しているのは、中部のコンダール州で有名になった「セアー・メトライ」である。妻子ある四十二歳の男性で、いかなる薬も用いず、水だけで、高血圧から、腎臓結石、肺病、心臓病に至るまで、ありとあらゆる病氣や怪我を治療するという。肩に羽根のような飾りのついた、古典舞踊の衣装にも似た、襟のない長袖の白衣を身にまとい、銀色の帯を締め、白い靴下を履き、白い座布団の上に座して、ろうそくと線香を灯している。北西部のシナム・リアプ州に住んでいた幼少の頃、ある不思議な石を拾ってからというもの、内戦時代もその石の魔力によって守護されてきたと感じていた。電化製品の修理工だったが、昨年の寅年陰暦六月上弦の十五日、夜明けも近い朝の四時に、「セアー・メトライ」がこの世の人々を癒すために、自らに乗り移ったと語っている。

同七月、同じくコンダール州で、ある大仙人が書き残した予言なるものが噂となり、人々の恐怖心をあおった。その予言とは、「某月になると、疫病が蔓延し、多くの死者が出る。鶏はときを告げなくなり、犬は吠えなくなり、幽霊や化け物や魔物が通りを徘徊する」、「某月某日には、遠出をするな。川を渡ると

水中から巨大な魚が出てきて人の姿に化け、人肉をむさばり食う」、「某月某日に、雨水を飲んではいけぬ。毒にあたつて死んでしまふ」というものである。

噂に関するカンボジアの諺には、「一羽のからすは十羽のからす」というものがあつて、人の口から口へと噂が広まってしまううちに、一羽だったからすがいつのまにか十羽に増えてしまうように、どんどん話が太げさになることを言い表している。また、これと一見相反するような、「つついたから、プナウの実が落ちる。屑があるから、犬が排泄する。溝があるから、水が流れる。真実だから、人々が口にする」という、いわば「火のなるところに煙はたたない」という諺もある。

真偽はともかく、今日も、あちらこちらのプサーで新たな噂が飛び交っていることだろう。